

「菊図」

葛飾北斎



© 北斎館 All Rights Reserved.

- Chrysanthemum - Hokusai Katsushika

Hanging scrolls, ink and colour on silk,
possibly late 1840s. Hokusai Museum, Obuse

江戸時代の園芸ブームをご存知ですか。世界でも稀に見る「園芸都市」だった江戸の町。植物の品種改良に人々は盛り上がり、大変な熱狂ぶりでした。菊もその一つ。

その頃に描かれたこの「菊図」。端に「八十八歳まんじ卅筆」とあります。卅は北斎の晩年の号です。人生のうちに、三十回も改号した北斎は引越しも、なんと九十三回。彼が晩年にお世話になったという長野県の小布施、この肉筆画はそこにある北斎館に収蔵されています。左幅の真ん中に咲く、黄色で裏が紅の美しい菊は「巴錦ともえしき」と言って小布施発祥と伝わる古典菊です。晩秋といえ菊、この時期には日本中でたくさん菊の行事があります。

実は最近の研究では、この絵は北斎とその娘、お栄えいの合作ではないかと言われています。お栄は自身も葛飾おうい応為という画号を持つ絵師でした。父の北斎も唸らせるその腕前は、細やかな描写と美しい光に特徴があり「江戸のレンブラント」とも称されます。

稀代の浮世絵師、北斎とお栄の親子の謎が詰まった「菊図」。これを収蔵している北斎館の館長さんはこの謎について、また更に深いご見解を持っていらっしゃるとのこと。是非、興味を持った方は訪れてみて下さい。江戸時代に咲いた花、北斎とお栄も見つめた菊。そんな花に思いを馳せてみるのも楽しいものです。

(「菊図」長野県小布施 北斎館蔵)

花物語

五

